RYUKOKU UNIVERSITY

Center Report

龍谷大学 学修支援・教育開発センター 通信

2024-2

龍谷大学 学修支援・教育開発センター 通信
2024-2

CONTENTS

2024年度自己応募研究プロジェクト 中間報告会 一覧 ―― 2

【全国私立大学FD連携フォーラム（JPFF）】
学修者本位の教育の実現―学生参画の観点から― ―― 3

【FDフォーラム】東アジアにおける高等教育の展開 ―日本への示唆― ―― 4

データでみる 龍谷大学生の学びの実態（留学生編） ―― 5

【FD研修会】シリーズ　学生と作る授業 ―― 6

【FD研修会】京都奏和高等学校における総合的な探究の時間
―「生き方・あり方」に向き合い表現するしかけ― ―― 8

学生による学期末の授業アンケート結果 ―― 9

ライティングサポートセンター活動報告 ―― 10

新着図書紹介 ―― 11

2024年度自己応募研究プロジェクト 中間報告会 一覧

学部FD

代表者名	プロジェクトテーマ	開催日	実施形態	中間報告テーマ	中間報告概要
伊東 秀章 （心理学部）	システムズアプローチによるケース理解促進のための教育手法の開発	10月11日	個別開催	「システムズアプローチによるケース理解促進のための教育手法の開発」前期実践報告	前期に2回実施した講義内容及び学生への調査結果を振り返り、今後に向けての検討を行う。
神谷 祐介 （経済学部）	オンデマンド授業の経験を活かしたICT×アクティブ・ラーニング型授業の実践と評価	12月13日	センター会議 開催時に報告	ICTを活用したアクティブ・ラーニング型授業の実践例	本研究で開発を進めるICTを活用したアクティブ・ラーニング型授業のプログラム（教材・カリキュラムなど）と実践例を紹介する。
栢木 紀哉 （経営学部）	ICT活用教育における学生の学修レベルの把握と可視化による授業改善に関する研究	12月13日	センター会議 開催時に報告	1年次生を対象とした「基礎能力判定試験」の可視化と学修状況について	2024年度の新入生に対して4月初旬に実施した「基礎能力判定試験」の得点データを項目ごとに集計してレーダーチャートに可視化した結果について報告する。具体的には、レーダーチャートを学生にフィードバックしてスキルレベルを自己評価してもらい、学修目標を立ててもらった結果、および1年次開講科目「情報リテラシー」受講後に実施した「単位認定試験」と比較した結果の概要について報告する。
生駒 幸子 （短期大学部）	保育者養成科目「保育内容（言葉）の指導法」における保育活動の学修に関する授業改善	6月18日 6月25日 7月 2日 7月 9日	公開授業 授業名：保育内容「言葉B」の指導法（短期大学部こども教育学科2年生）	教材研究に基づく保育活動の考案・実践を実現するアクティブラーニング・プログラムの検討	学生はグループごとに1冊の絵本をもとにイメージをふくらませ乳幼児期の発達に相応しい保育活動を考案し、保育指導案を立案する課題に取り組んだ。その保育指導案を保育実践に展開する学習としてグループで模擬保育を行い、保育実践力の獲得を目指す。
堺　恵 （短期大学部）	児童養護施設での実習に向けた視聴覚教材による効果の検証	5月 1日	公開授業 授業名：児童養護施設での実習に向けた視聴覚教材による効果の検証	児童養護施設での実習に向けた視聴覚教材による効果の検証	保育士資格取得のために必要とされる施設実習のうち、児童養護施設での実習に焦点をあて、施設職員の協力のもと、教材を作成した。完成した教材を学生に視聴してもらい、その効果を測定するための授業を行う。この授業を公開とし、中間報告とする。
野口 聡子 （短期大学部）	授業改善を目指した児童養護施設での食事提供に関する実態調査	12月13日	センター会議 開催時に報告	授業改善を目指した児童養護施設での食事提供に関する実態調査	授業改善を目指し、協力依頼をしている児童養護施設へ食事提供の実態を調査するために、研究実施に対する同意書を取得し、研究実施の協力を得られた。各施設で提供されている食事内容の写真の収集を実施中であり、その資料写真をまとめ、各施設に学生への授業で伝えるにあたって各施設側からのアドバイスをいただき、意見交換を実施した内容を報告する予定である。また、学生に伝える教材として齟齬がないか、各施設と確認作業を今後行う。その後、授業で使用する教材として作成していく。上記調査研究の進捗状況を中間発表で報告する

全国私立大学FD連携フォーラム（JPFF） 学修者本位の教育の実現 ―学生参画の観点から―

2024年6月15日（土）、全国私立大学FD連携フォーラム（JPFF）主催のシンポジウム「学修者本位の教育の実現ー学生参画の観点からー」が深草キャンパスにて開催されました。本シンポジウムは対面とオンラインのハイブリッド形式で行われ、合計118名の参加がありました。

JPFFは学生の規模や多様性の面で共通の課題を抱える私立大学が互いに持てる力を出し合い、FD分野において連携することを目的としており、本学は代表幹事校として本シンポジウムを企画しました。

中央教育審議会の答申「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」には、教員中心から学生中心の高等教育機関に転換していくことが示されており、学修者を起点にして大学の質保証を担保していくことが重要です。近年、日本でも欧米の学生参画の概念が注目されていますが、制度として十分根付いていない現状があります。一方で、学生のピアサポートや自治組織を活用した取り組みを実施している大学があります。本シンポジウムでは、こうした各大学の取組みを学生参画という観点から整理・検証すると共に、新たに学生参画の仕組みを導入する大学においても自身の大学に見合った取組みを模索していくことで、学修者本位の大学教育を実現することに繋げていくことを目指しました。

まず、筑波大学の田中 正弘 准教授に「日本の大学における学生参画の現状と今後の可能性ー学生参画の意義に着目してー」と題してご講演いただきました。教員は「授業をより良くするために日々改善に努めている」と思っているが、学生は「理解できない。教員の教え方に問題がある」と思っているなど、教員と学生の間に乖離があり、その乖離を解消するために、教員、職員、学生の三者が協働することの必要性をご説明いただきました。講演に続いて、学生参画はなぜ必要なのか、その意義を考えるために、対面参加者によるグループディスカッションが行われました。各グループにおいて、現状と今後の可能性について活発な議論が交わされました。

続いて、愛知東邦大学の武 寛子 准教授から「スウェーデンの大学における学生参画の歴史と学生の評価リテラシーー学生参画を支える基盤ー」をテーマにご講演いただきました。スウェーデンでは議論する際に、あえて反対意見を入れて、合意形成していくという「参加民主主義」の考え方があるそうです。そのため、ボローニャ・プロセスにおいて内部質保証への学生参画が重視され、質保証への学生参加を促進した際も、参加民主主義をモデルに進めることができたとのことです。そのような背景もあり、スウェーデンの仕組みをそのまま日本で活用できるわけではないものの、学生の視点を重視した内部質保証に活かせる取組をご紹介いただきました。

さらに、成城大学の肥田 奈緒子 氏から「教職学協働の学びのコミュニティーー学生の声を活かす成城大学のピアサポート活動ー」と題して、成城大学での具体的なピアサポート活動をご報告いただきました。

最後に、本学学生部課長の石原 芳典 氏から「学生と教職員との協議機関『全学協議会』について」と題して、全学協議会の活動内容とその意義についての事例報告が行われました。また、全学協議会に学生代表として参加した学生からも実体験を基にした報告がありました。

単に大学側のエビデンスの材料として学生を「利用」するのではなく、学生が大学運営に「参画」することが学びの質の向上に繋がるということが明らかになり、教育の質向上における学生参画の重要性を再認識する貴重な機会となりました。

FDフォーラム　東アジアにおける高等教育の展開 ―日本への示唆―

2024年12月5日（木）に「東アジアにおける高等教育の展開 - 日本への示唆 -」を開催し、学内外から61名のご参加がありました。

小川 佳万 氏

近年、日本の教育現場では多くの課題が浮き彫りになっています。特に高等教育においては、教育の質保証、文理融合的な学びの推進、そして学生支援の充実が重要なテーマとなっています。

今回、近隣東アジアの高等教育の現状を踏まえ、日本の高等教育の将来を考える場として、広島大学大学院 人間社会科学研究科教授の小川 佳万 氏をお招きしました。小川先生は2023年度にイタリアのボローニャ大学で訪問教授を務められ、中国、台湾、韓国をはじめとする東アジア諸国の教育制度について幅広い研究を行っておられます。講演では大学入試改革や留学生募集戦略、さらには高等教育の大衆化に伴う学生支援の実例について詳しくお話しいただきました。

講演のあと、参加者から寄せられた質問に基づき、小川先生と本学の教学担当副学長である安藤副学長との対談が行われ、活発な議論が展開されました。

例えば、「韓国や台湾では多様な学生を獲得するために筆記試験以外の総合型選抜が増加しているが、日本で導入する際にはどのような工夫が必要か」という質問に対して、小川先生は面接を実施する重要性を指摘されました。手間はかかるものの、知識や技能だけでなく、やる気や学びへの姿勢を評価するためには必要であり、日本でも韓国や台湾のような総合型選抜の導入が望まれると述べられました。

さらに、安藤副学長は本学の現状を踏まえ、「やる気を重視した入試について、学部独自で取り入れているものの、全学的な展開が難しい状況であり、筆記以外の試験に対する評価方法の確立が課題」との問題提起がありました。これに対して小川先生からは、台湾や韓国においても同様の課題があるものの、教員の間では筆記試験以外の評価が徐々に受け入れられつつあり、受験生本人を確認する面接が重要になっていると説明がありました。

安藤副学長との対談の様子

また、日本に比べて、充実している台湾の給付型奨学金についての質問では、台湾では企業が大学を支援する仕組みがあり、企業が大学に寄付を行い、それを学生支援に活用する文化が根付いていることを紹介されました。一方、日本の現状では同様の制度を直ちに導入するのは難しいものの、アメリカのような基金を活用した奨学金制度の構築や、台湾のように社会と連携することができれば、日本でもより多くの給付型奨学金が提供可能になると示唆されました。

さらに、東アジア全体で学部生の減少が進む中、社会人大学院生を獲得する必要性についても議論されました。台湾では、社会人大学院生を増やすことが大学の多様性を高め、実務経験を持つ学生が学びに参加することで教育の質が向上する可能性があると指摘されました。

本フォーラムを通じて、高等教育の課題と可能性を多角的な視点から探ることができ、非常に実りの多い時間となりました。

参加者のアンケート（抜粋）

- 東アジアの高等教育事情が様々な観点からわかってよかったです。国内のことだけに目が向きがちですが、日本だけでない共通の課題や、様々な解決のヒントが得られました。
- 学生支援について日本で聞いたことがないような取り組みがあり参考になった。
- 質の高い教育への転換と総合型選抜入試のジレンマにどう対応するのかが大きな課題だと感じました。

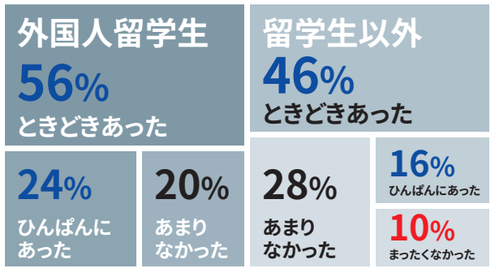
データでみる 龍谷大学生の学びの実態（留学生編）

龍谷大学では、学生の学びの実態を把握するために、学生調査を実施しています。この調査は、龍谷大学も加盟する一般社団法人大学IRコンソーシアムが企画したもので、設問内容には学生の学習行動や学習時間、能力に関する自己評価、満足度などが含まれています。この調査を通じて、学生が大学での学びをどのように受け止め、評価しているのかを把握しています。

本学で開催したFDフォーラムでは「東アジアにおける高等教育の展開」をテーマとしたことから、今回は同調査における本学の留学生の学びの実態について紹介します。

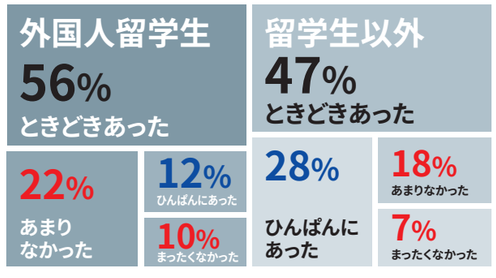
■外国人留学生　■留学生以外

授業中に学生同士が議論する



- 本経験について、「まったくなかった」と答えたのは留学生で0%、留学生以外は10%
- 「ひんぱんにあった」「ときどきあった」の回答割合を足すと留学生が80%、留学生以外が62%

授業時間外に、他の学生と一緒に勉強したり、授業内容を話したりした

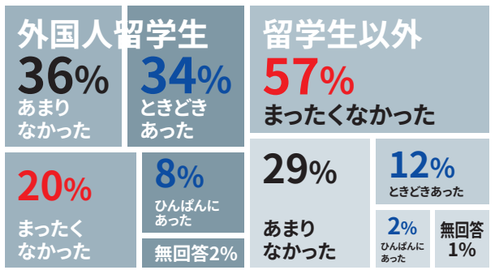


- 「あまりなかった」「まったくなかった」の回答割合を足すと留学生が32%、留学生以外が25%
- 本経験について、「ひんぱんにあった」と答えたのは留学生で12%、留学生以外は28%

外国人留学生の方が授業中に議論する機会が多かったといえます。
一方、外国人留学生は授業外での交流が少なかったことがわかります。

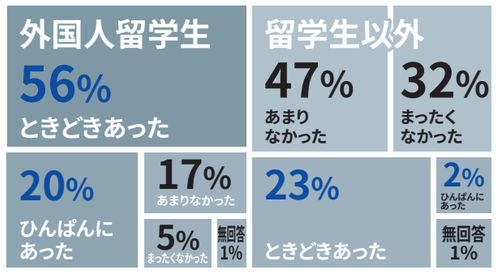
学内での学習支援をうけた

（教職員への相談、学内の学習支援室の利用）



- 本経験について、「まったくなかった」と答えたのは留学生で20%、留学生以外は57%
- 「ひんぱんにあった」「ときどきあった」の回答割合を足すと留学生が42%、留学生以外が14%

教員に親近感を感じた



- 「ひんぱんにあった」「ときどきあった」の回答割合を足すと留学生が76%、留学生以外が25%

留学生は学習支援を積極的に活用し、
教員との関係も良好であることがわかります。

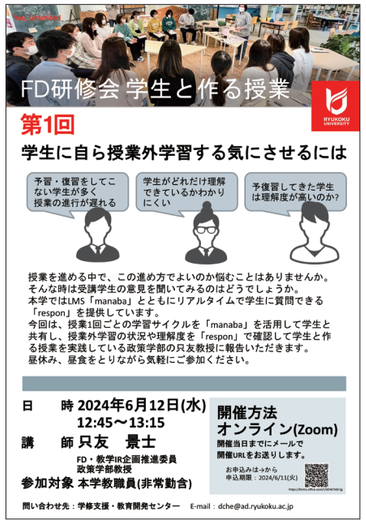
外国人留学生と留学生以外の学生が共に学ぶことによって、異なる文化や価値観に触れることにより、学生は視野を広げ、自らの考えを深めることができるなど、多くの教育的意義が期待されます。さらに、外国人留学生が持つ多様な教育経験や学習方法は、学びの場をより豊かにしてくれるでしょう。

本学では、外国人留学生と留学生以外の学生が交流を通じて共に学ぶ機会を多く用意しています。約20か国・地域の留学生と交流できる「International Week」、交換留学生が自身の出身国・地域の言葉や文化、料理やファッションなどを紹介する「地球がキャンパスだ」、留学生の日本語会話力向上のため、日本人学生が日本語会話ナビゲーターとして活躍する「日本語会話ナビゲーター」、交換留学生が日替わりで語学アドバイザーとなり、各国の言語で交流できる「語学アドバイザーとFREE Talk」、外国人留学生と料理をしながら国際交流を行う「Global Kitchen」など様々な国際交流の取り組みを定期的に開催しています。

FD研修会　シリーズ　学生と作る授業

第１回　学生に自ら授業外学習する気にさせるには

2024年6月12日（水）にオンラインで、只友 景士 教授（政策学部）を講師にFD研修会「学生と作る授業－学生に自ら授業外学習する気にさせるには－」を開催し、28名の参加がありました。

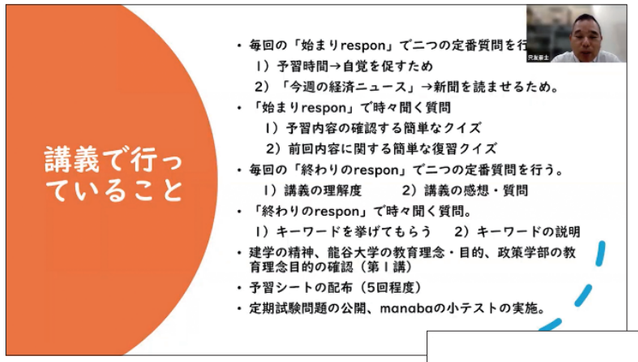


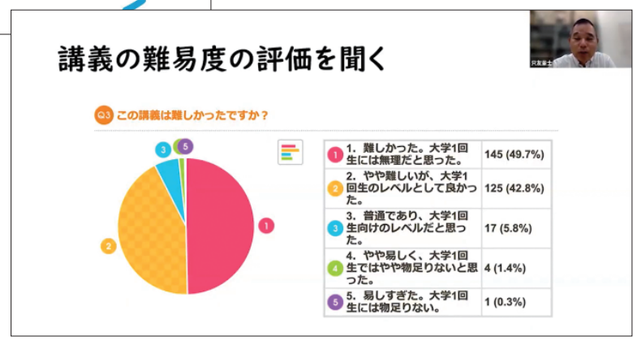
本学では、学修管理システム（LMS）「manaba」とリアルタイムで学生に質問できる「respon」を授業で利用できます。4月に実施した新任教員向けのFD研修会で「respon」を紹介しましたが、参加者から多くの質問が寄せられました。授業に学生の意見を取り入れ、双方向のコミュニケーションを図ることへの関心が高いことが分かりました。今回のFD研修会はそういった声をもとに企画しました。

只友教授は、2019年度まで、予習を指示しても予習してこない学生が多く、予習していない学生に合わせて授業を行っていました。学生は「予習しなくても何とかなる」と考えて授業に臨んでいたようです。しかし、コロナ禍でオンライン授業が始まると、対面授業のように学生の様子を確認しながら進めることができなくなり、予習を前提とした授業を行わざるを得なくなったとのことです。その対策として、予習範囲とキーワードを事前にmanabaで連絡し、授業当日はresponを使って予習の状況を確認されました。さらに、理解度を測るために毎回クイズや質問を行うようになったとのことです。このようにして、予習を前提とした授業スタイルが確立され、学生が自分の学習状況を振り返るきっかけにもなりました。

授業アンケートでは「事前に予習をしなければならないため、予習をする習慣がついた」「予習の段階でわからないことがあっても先生が講義の際に教えてくださったので理解することができた」「学習した内容をすぐに忘れてしまってもっと復習すべきだった」などの回答があり、学生が自ら「予習をしよう」「復習をしよう」と思うような授業運営ができるようになりました。

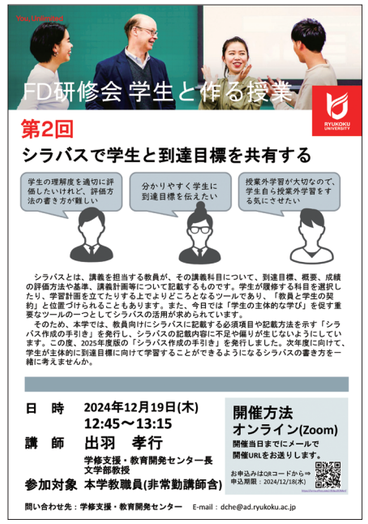
今回の研修会ではmanabaやresponを通じて学生の理解度を把握することで、学生とともにより良い授業を作っていけることがわかりました。本センターではこれからも、学生の意見を授業に活かす取り組みを紹介する機会を設ける予定です。





第２回　シラバスで学生と到達目標を共有する

2024年12月19日（木）にオンラインで、出羽 孝行 教授（文学部）を講師にFD研修会「学生と作る授業－シラバスで学生と到達目標を共有する－」を開催し、24名の参加がありました。



シラバスは、講義を担当する教員が講義科目の到達目標や概要、成績評価の方法や基準、講義計画などを記載するもので、学生が履修科目を選んだり、学習計画を立てたりする際に欠かせません。今では「学生の主体的な学び」を促すための大事なツールとしても活用されています。本学では、教員向けに「シラバス作成の手引き」を発行し、授業担当者によって内容に不足や偏りがないように工夫しています。

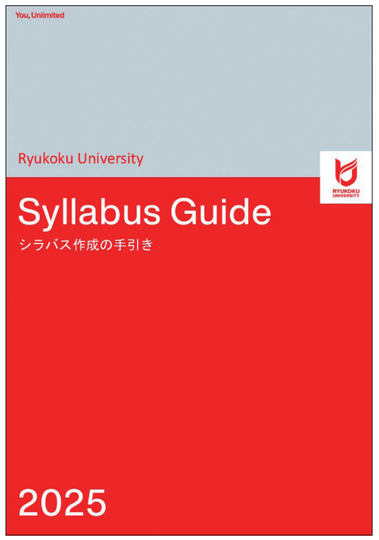
このたび、2025年度版の「シラバス作成の手引き」を発行しました。今回の発行にあたっては、全学協議会（大学執行部と学生代表との協議の場）で学生から「実際の授業とシラバスの内容に差がある」との声が寄せられたことを受け、その点を改善する内容に改訂しました。シラバスと授業内容が一致することで、学生が安心してより良い学びにつながるものと考えています。

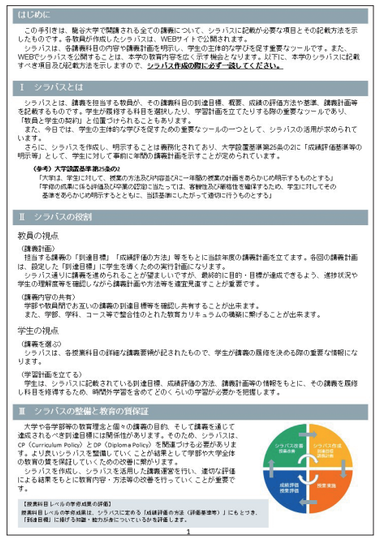
今回のFD研修会では、次年度に向けて、学生が自分の目標に向かって主体的に学べるようなシラバスの書き方についても一緒に考えていくことができました。また、授業アンケートの集計結果を紹介し、その結果を次年度に活かす方法についても紹介されました。

今後も、学生の声を授業に活かす取り組みを紹介していく予定です。

参加者のアンケート（抜粋）

- 事例を交えた内容であったため具体的なイメージをもつことができました。
- 「（受講態度について）主体的に学ばせるのではなく、（授業を通じて）主体的な姿勢が身につく」がポイントというお話に納得しました。1回1回の授業で「主体的に学ばせる」ことに囚われていたのかなと気づきました。
- 授業アンケートの結果を学生と共有して更なる改善に繋げるという点が新しい発見でした。
- 学生の視線にも立ってシラバスを執筆するための多くのヒントをいただけました。到達目標を観察可能な形で具体的に記述するためのヒントや、アクティブ・ラーニング型の授業を展開するためのヒントをいただけたのが、特にありがたかったです。





FD研修会　京都奏和高等学校における総合的な探究の時間 ―「生き方・あり方」に向き合い表現するしかけ―

2024年7月29日（月）にFD研修会「京都奏和高等学校における総合的な探究の時間 ―「生き方・あり方」に向き合い表現するしかけ―」を開催し（対面・オンライン併用）、86名の参加がありました。

井上 翔一 氏

高等学校では2022年度入学の生徒から新学習指導要領にそった授業が始まり、探究学習が重視されています。そのような中、2022年度から“探究”をキーワードにFD研修会を開催してきました。4回目となる今回は、京都奏和高等学校の教育実践について、同校教諭で、「令和5年度京都市立高等学校総合的な探究の時間研究会」事務局長を務められた 井上 翔一 氏を講師にお招きしました。同校における「生き方・あり方」を軸とした展開が求められる総合的な探究の時間の取り組みについてご講演いただきました。

同校では「出口指導」と混同・傾倒しがちなキャリア教育を「生き方・あり方探究」へのアプローチとしてとらえ、自分の生きたい・ありたい姿を理解し、その実現のために自ら思考・選択・行動に移すことを指導されています。そのフィールドは職業に留まらず、広く社会と互助関係を築くことが大事だと述べられました。

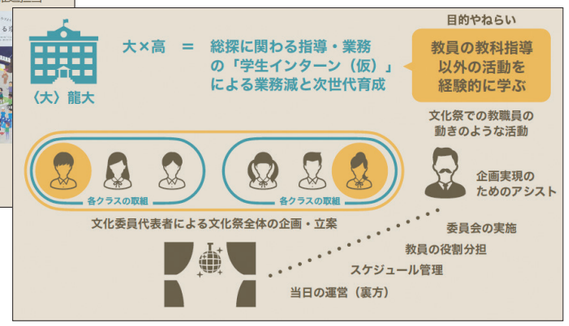
そして本学・京都市・京都信用金庫との産学官連携で進めている探究活動「ビジテック」についてご紹介いただきました。

産学官連携で進めるこの探究活動には、本学の学生がSOU-TERN（学生有償インターン）として参加しています。SOU-TERNは教員の教科指導以外の活動を経験的に学ぶことを目的・ねらいとしています。参加した学生3名から「自分も探究の授業は受けていたけれど、調べる過程を勉強するというものでした。奏和高校のSOU-TERNに参加して探究といっても様々な取り組みがあると思いました」「学校現場を教育実習以外で経験できるというのは貴重な機会だった」「教科指導以外にも学校の先生にはいろんな仕事があることが実感できた」と報告がありました。

SOU-TERN 参加学生報告の様子

いよいよ2025年度は、新学習指導要領のもとで学んだ生徒が大学へ進学してきます。高校での取り組みを参考にして大学でどのように活かすのか、高大連携をはじめ、新たなカリキュラムや授業の改善を考える機会となりました。

産学官連携で進める探究活動の連携図



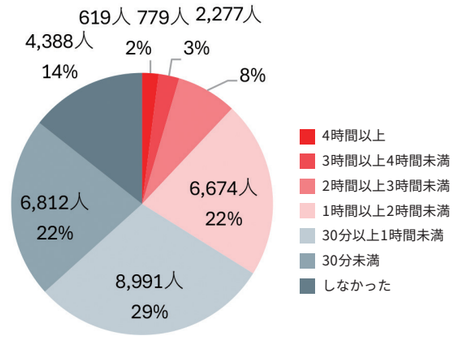
大学と高校が連携することの効果

学生による学期末の授業アンケート結果

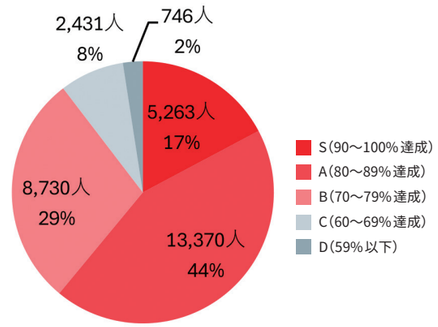
2024年7月10日（水）～8月5日（月）に第1学期（前期）の「学生による学期末の授業アンケート」を実施しました。（クォーター科目は5月22日（水）～6月17日（月））

回答は本学のLMSであるmanaba course上で収集し、のべ30,540件の回答がありました。各設問の回答状況は以下の通りです。

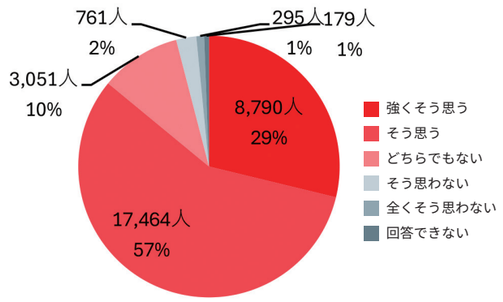
Q1　１回の授業に対して、平均してどのくらい授業外学習（自主学習（事前・事後学習を含む）・課題学習など）を行いましたか。



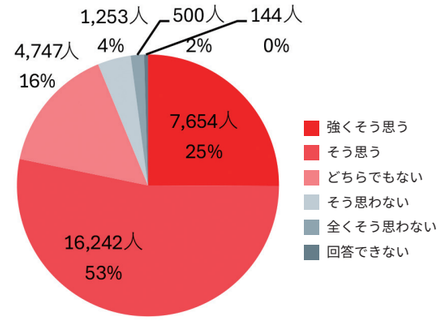
Q2　この授業のシラバスに示されている「到達目標（目的・ねらい）」を、どの程度達成できたと思いますか。



Q3　この授業はシラバスにそって計画的にすすめられていましたか。



Q4　この授業に対して、意欲的に取り組めたと思いますか。



多くの学生が授業外学習に「30分以上1時間未満」または「1時間以上2時間未満」と回答しており、一定の時間、取り組んでいることが分かります。履修要項に記載されている学修時間の目安に対してはやや不足しているものの、教員から提示された課題にじっくり取り組むことで成績向上が期待されます。

シラバスに示されている「到達目標」の達成状況については、60%以上の学生が「S（90～100%）」または「A（80～89%）」の達成度を報告しており、シラバスをしっかり読み、到達目標を意識した学習を行っていることが伺えます。

シラバスに沿って授業が進められていたかについては、85%以上の学生がシラバス通りに進められていたと回答しており、計画的な授業進行が行われています。

最後に、約80%の学生が意欲的に取り組めたと回答しています。自由記述欄に「自発的に考え、行動することを心掛けている」との回答もあり、到達目標を意識した学習や、教員からのフィードバックを活かして主体的な学習が行われています。

アンケートの結果を総合すると、学生たちはシラバスを活用して到達目標を意識して学習していることが伺えました。

ライティングサポートセンター活動報告

ライティングサポートセンターでは、大学院生のライティングチューターが中心となり、龍谷大学生のレポートや卒業論文など文章作成にかんする相談を受け付けています。2024年度第1学期（前期）の相談実績および、2024年度に実施した講習会について報告します。

1. 2024年度 第1学期（前期）相談実績

（1）開室期間：4月15日（月）～7月29日（月）　授業実施期間中および定期試験期間中に開室
（2）開室日数：69日（昨年度：69日）
（3）相談者数：のべ459人（うち初めての利用者数：285人）（昨年度：416人）
（4）相談者の内訳

①学部（大学院）学年別（人）

学部／研究科		1年生	2年生	3年生	4年生以上	修士	博士	研究生	交換留学生	学部別合計 人数	学部別合計 割合
文		55	47	21	29	1	0	0	1	154	33.6%
心理		2	0	—	—	—	—	—	0	2	0.4%
経済		0	5	8	6	4	0	0	0	23	5.0%
経営		21	1	0	16	0	0	0	0	38	8.3%
法		8	4	2	0	0	0	0	0	14	3.1%
国際		100	7	15	7	3	0	0	0	132	28.8%
政策		3	0	0	5	0	0	0	0	8	1.7%
先端理工		4	2	1	2	0	0	0	0	9	2.0%
社会		16	23	9	2	0	1	11	0	62	13.5%
農学部		10	3	2	0	0	0	0	0	15	3.3%
短期大学部		2	0	—	—	—	—	—	0	2	0.4%
学年	人数	221	92	58	67	8	1	11	1	459	100%
	割合	48.1%	20.0%	12.6%	14.6%	1.7%	0.2%	2.4%	0.2%	100%	100%

②相談内容の種類　※1回のセッションで複数の種別対応をしたケースを含む。

分類項目	件数	割合（%）
卒論・卒研	54	11.8%
レポート	330	71.9%
プレゼン（ゼミ発表・レジュメ）	18	3.9%
ゼミの志望理由書	17	3.7%
修士論文	6	1.3%
研究計画書	10	2.2%
就職関係の文書	7	1.5%
留学関係の文書	2	0.4%
奨学金関係の文書	5	1.1%
そのほか	17	3.7%

※そのほかは、大学院の志望理由書、IELTSなど。

引き続き、ライティングサポートセンターを積極的に活用していただきますよう、よろしくお願いいたします。

2. 2024年度に実施した講習会

通常の相談対応に加えて、ライティングスーパーバイザーやチューター・リーダーが講師となり、これまで蓄積された相談者のデータをもとに学生が躓きやすい内容をピックアップした講習会を実施しています。本年度は、対面とオンラインのハイブリッド形式で昼休みに実施しました。

日程	テーマ	講師
5月22日	レポートのタイプを知る　―レポートを書きはじめる前に―	ライティングサポートセンター チューター・リーダー　釋氏 乗智さん（文学研究科）
5月24日	レポートの実際を知る　―論証とは―	ライティングサポートセンター チューター・リーダー　笹原 有貴さん（文学研究科）
10月11日	卒業論文・論証型レポートをスムーズに作成するために ～論文の基本、再確認！～　※大宮キャンパスにて対面のみで実施	ライティングサポートセンター チューター・リーダー　神林 声さん（文学研究科）
10月16日	卒業論文・卒業研究をスムーズに作成するために ～論文の基本、再確認！～	ライティングサポートセンター チューター・リーダー　東野 空さん（文学研究科）
10月21日	レポート・卒業論文に役立つ資料の探し方	ライティングサポートセンター チューター・リーダー　森 恵士さん（文学研究科）
10月23日	引用の仕方と注・参考文献の書き方	ライティングサポートセンター チューター・リーダー　岩間 智昭さん（文学研究科）

これらの講習会は、開催後、多くの龍谷大学生に役立ててもらえるように、動画コンテンツとしてオンデマンドで配信しています（10月11日開催分を除く）。ライティングサポートセンターのホームページの「役立つツール」に掲載しています。右のQRコードからアクセスしてください。

新着図書紹介

KH Coder OFFICIAL BOOK II

動かして学ぶ！はじめてのテキストマイニング
フリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析

ネット上のクチコミ，SNSでの評判，自由回答のアンケート…どのように分析しますか？

学術論文や企業などで幅広く使われている定評あるフリーソフト「KH Coder」を使ったテキストマイニングを，開発者自らがやさしく解説。事例を手順を追って解説することで，誰でもテキスト分析ができるようになるやさしい入門書。

本書では，フリー・ソフトウェアKH Coderを使ってテキストマイニングを行なう手順を，はじめての人にもわかりやすく，それでいて使いこなすためのポイントも含めてご紹介します。テキストマイニングとは，クチコミのようなテキスト（文章）について個人の感想や印象で語るのではなく，統計を使って正確かつ客観的に分析する方法です。（「まえがき」より）

出版年月：2022年3月
著　　者：樋口 耕一／中村 康則／周 景龍
発 行 所：ナカニシヤ出版
価　　格：2,420円（税込）
ページ数：130p
大 き さ：B5判
ＩＳＢＮ：9784779516399

シリーズ大学教育の質保証

学習成果の評価

学習成果の評価とその評価結果の活用方法について実践的な知識を体系立てて提示することで、大学教育の質保証に関わる教職員を支援する。特にカリキュラムにおける学習成果に着目し、設計から改善までの一連の流れを網羅的に記述。また、さまざまな実践方法の選択肢を提示し、読者が現場でアレンジできるヒントも盛り込む。

出版年月：2023年10月
編　　著：竹中 喜一【編著】
上月 翔太・中井 俊樹・中島 英博【著】
発 行 所：玉川大学出版部
価　　格：2,200円（税込）
ページ数：204p
大 き さ：A5判
ＩＳＢＮ：9784472406256

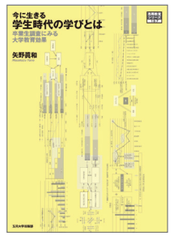
大学の質保証における教育プログラムの評価と改善
―IR機能を活用した好循環づくりのティップス―

質保証の要請に応えつつ、大学は根拠に基づく教育プログラムの評価と改善をどのように進めればよいのか。現場の課題解決を目指して、本書はインスティチューショナル・リサーチ機能が支える評価と改善の好循環モデルを提示している。さらに、全国調査やヒアリング調査に基づき、多様な学部のグッドプラクティスを手がかりに、好循環モデルにそくして開発したティップスも提供している。FDや教学IRの最前線に立つ著者らが、第4期認証評価等の動向を見据えながら、組織的な課題や備えるべき視点、効果的なアプローチ等を提案した、内部質保証推進の助けとなる一冊。

出版年月：2024年3月
編　　著：鳥居 朋子
発 行 所：東北大学出版会
価　　格：3,850円（税込）
ページ数：256p
大 き さ：A5判
ＩＳＢＮ：9784861633935

高等教育シリーズ

今に生きる学生時代の学びとは
卒業生調査にみる大学教育の効果



「大学で学んだことは社会で役立たない」よく聞かれるこうした発言は果たして的を射ているのか。膨大な卒業生調査のデータを、社会工学や統計分析の知見を活かして実証的に分析。その結果浮かび上がってきた、卒業後に生きる大学の教育効果の真の姿とは。今後、高等教育を論じる上で必読となるべき研究書。

出版年月：2023年6月
著　　者：矢野　眞和
発 行 所：玉川大学出版部
価　　格：3,520円（税込）
ページ数：336p
大 き さ：A5判
ＩＳＢＮ：9784472406300

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して

全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実とは。本書ではこの問いに迫るために，当代きっての著者たちが，現状において考えうる多様な回答を理論と実践の両側面から検討する。「一人一人の子供を主語にする学校教育」の実現に向けて，いま何ができるのか。その手がかりがここにある。

出版年月：2023年11月
著　　者：奈須 正裕・伏木 久始
発 行 所：北大路書房
価　　格：2,640円（税込）
ページ数：352p
大 き さ：A5判
ＩＳＢＮ：9784762832383

21世紀型リベラルアーツと大学・社会の対話

予測不可能な時代に応えた人材育成を目指す大学の取り組みと提言！

VUCA（Volatility：変動性、Uncertainty：不確実性、Complexity：複雑性、Ambiguity：曖昧性）と呼ばれる予測不可能な時代に要請される人材・能力育成に向け、各大学で「21世紀型リベラルアーツ教育」が試行錯誤されている現状だ。それを深化発展させるためには、緊密ではなかった大学と企業・社会との間の絶え間ないコミュニケーション・対話が必要だ。大学と企業双方欠落していた問題の綿密な調査と分析を通じて、大学での教育実践内容と企業・社会が求める期待との間にある意見の違いを浮かび上がらせ、両者間の双方向の対話を促したJUAA選書第19弾！

出版年月：2024年4月
編 著 者：山田 礼子
発 行 所：東信堂
価　　格：3,410円（税込）
ページ数：296p
大 き さ：A5判
ＩＳＢＮ：9784798919041

図書貸し出しのご案内

学修支援・教育開発センターでは、高等教育やFDに関する図書を購入し、教職員へ貸し出しを行っておりますので、是非ご利用ください。専任教職員につきましては、学内便での貸し出しも可能です。1. お名前、2. ご所属、3. 教員／職員の別、4. 貸出希望の書名、5. 著者名を明記の上、dche@ad.ryukoku.ac.jp までお申込ください。

詳細は、**https://fd.ryukoku.ac.jp/for_teacher2/** をご参照ください。

2025年1月発行（通算53号）
編集・発行　龍谷大学　学修支援・教育開発センター

〒612-8577　京都市伏見区深草塚本町67
075-645-2163　https://fd.ryukoku.ac.jp/